
シーナの事情

イチル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シーナの事情

【Nコード】

N4873Y

【作者名】

イチル

【あらすじ】

レキルス王国の王都ガレストラにある本屋『サクラ』を営むのは、日本から能力を持って異世界トリップしてきた少女、田宮椎名。これは本屋（でも裏では情報屋）な彼女とそれを取り巻く周りの人達の友情恋愛その他もろもろの事情。*****毎回23時に更新します

1 彼女の事情

ガレストラは今日も賑わいをみせていた。

多くの歩行者よる騒音の中に売り子娘の少し高めの声が響き、人々は思い思いの店で互いに有益になるよう買い物をする。

ある人が興味なさげに視線を外したモノを、他の人が輝いた瞳で見つめたり。

大金を軽く払う人もいれば、お金が足りずに溜息をつく人もいる。その顔は十人十色。

レキルス王国の主な産業は武器。

その王都であるこの街は、良い武器といえばガレストラ、と言われるほど有名で、それを扱う騎士たちの腕も大陸一だ。

そんな街だからもちろん殆どの店が武器屋。

そのかわり武器屋の競争率は激しいが、他の店の中には街に一軒しかない店などもあるので、そういった店は客を一人占めできるのだ。

そんな街に一軒しかない本屋『サクラ』を営んでいるのが、この私。

シーナ・ターミヤ、もとい田宮たみや 椎奈しいな。

3年前、15歳のときに日本から異世界トリップしてきた本好きの少女だ。

この店は、その際に神様から貰ったもの。

本に関わる仕事につくのは小さい頃からの夢だった。

もともと私は知識欲が他人と比べて凄くあり、世界の全てを知りたいと常々思っていた。

まあ、それは無理だとは分かってはいたが。

体が弱く生まれた頃から入院中だった事もあり、よく本を読んでいたら段々とその魅力にとりつかれてしまった。

そんな所を神様に気に入られて強制的に異世界トリップさせられた。願いを3つ叶えてあげよう。

そう言われて、言った願いの1つ目が「本屋の店長になりたい」である。

どうやって叶えてくれるのかな〜と思っていたら、トリップした先に助けたおじいさんが経営していた本屋を「もう自分は年だから」と言い、くれたのだ。

そのおじいさんは今、隣国にいる息子夫婦の元に住んでいる。

2つ目の願いは「身体能力の向上」。

理由は今まで外で遊んだ事があまりなかったため、向こうではめいっぱい楽しもうと思ったからだ。

あの神様はついでに魔力も最高にサービスしてくれた。

おもいきり楽しんでこい、と。

ちなみに隠しているが魔力量と質は世界で1番、剣技では宙に投げた玉ねぎのみじん切りを2秒でできるくらいだ。

チートやばい、そして便利。

おかげで今は異例の早さでギルドランクBだ。

3つ目は「その世界の全てが知りたい」。

国家の秘密から隣の家の晩御飯まで、全て。

そう言ったとき神様は満足気に微笑んで、一冊の本をくれた。今、私の横においてある鈍色の本がそうだ。

表紙の絵も題名もない中身も白紙なこの本は、実はこの世界の知識の塊。

知りたいと思った情報だけを載せてくれる神様特製の本。

例えば私が「あの人誰だっけ」と思いながら本を開くと、その人物の名前と生年月日、家族構成や育ち方、周りからの評判まで書かれている。

プライバシー皆無もいいところ。

まあ、こんな能力もあつて実は私は本屋件情報屋だったりする。

2 本屋のお客様

カランコロソ

「いらつしゃい、レオンさん。今日はどんな本をお探しですか？」

店の中に入ってきたのは少し波打ったサラサラの金髪に透きとおる海色の瞳の美青年。

それはまるで御伽話に出てくる王子様のような……っていうか王子様だ。

正真正銘この国の皇太子であるレディオン・リンド・フルノ・レキルス殿下。

先ほどの『レオン』という名前は偽名だ。

彼はたまに病弱な妹姫のために身分を隠して本を買いにきている。

勿論、私の情報本にかかれば素性などすぐ分かるので、身分を隠しても意味がない。

別に誰これ構わず個人情報を見ているわけではなく、最初にこの店に來たときに平民と言つわりにはやけに身なりがいいから氣になったのだ。

「こんにちは、シーナ。今日も妹のために本を買いに來ただけだ……」

「じゃあ、この本なんてどうですか？今流行つてゐる恋愛小説。私のオススメですよ」

私が近くの棚から取り出したのは桃色の本。

ノイズというこの本の作者は他国の間でも有名で、毎回ベタで甘い

ラブストーリーを書くので女性受けがいい。
そんな大物小説家の彼女は私の友人でもあるのだが、この話はまたの機会に。

レオンは本を手に取りパラパラと中を見る。

そして、最後まで見終わった後のこちらへ向ける視線はとても満足気だ。

それに対して私もニツコリと微笑むと、途端にレオンの顔が真っ赤になる。

何故に？

たまにこういった事があったのだが、理由が分からない。

そのたびに王様ってポーカーフフェイスが大切なのではないのか、と彼の将来が少し心配になる。

そして、しばらくの間の沈黙。

2人ともが何を話そうか考えているときに、急に本屋のドアが勢いよく開いた。

「シーナいる？」

入ってきたのは茶色の髪をポニーテールにくくった女。

その手には朱色の宝石がついた銀色の杖。

彼女はアイリス・キュート。

Aランク冒険者の魔法使いの私の友人で、レオンの元クラスメイトでもある。

レオンが通っていた学校、となると一国の皇太子が通うような学校なのだが、彼女は実は孤児院出身だ。

魔力量の高さをかわれて無理矢理入学させられたらしい。

その卒業後には数多の勧誘を振り切って冒険者になり、今は各地を転々と巡っている。

彼女と出会ったのは私が暇つぶしにギルドで依頼を受けていたとき、討伐対象も倒してさあ帰ろうというときに邪竜と戦っている彼女と出会った。

苦戦していたようなので手助けをしたのが切欠だった。

という話は閑話休題、またいつか。

「いらつしゃいませ、アイリス。今回はどんなものをお探しで？」

助かった、アイリス。

あの気まずい空気は苦手だ。

とりあえず、まだ顔がほんのりと赤いレオンは置いて、アイリスの相手をしよう。

それにしてもレオンは美形だから頬を染めると乙女にしか見えない。

「ん？レオンはいいの？まあいいや、この本の修理を頼める？」

そう言っただけ渡されたのは特に壊れた様子もない普通の本。

これのどこに直さないといけない所があるかというところ……そんなものは、ない。

だが私は困った顔もせず、逆にニヤリと笑った。

「分かりました。少々お待ちください」

そういうと、私はその本と傍らの鈍色の情報本を持って店の奥に入った。

さて、情報屋としての仕事がんばりますか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4873y/>

シーナの事情

2011年11月17日19時57分発行